

同族目的語構文の 카테고리に関する一考察

堀田優子

1. 序 —その特徴や先行研究—

英語における同族目的語構文 (cognate object construction) は, (1)の例文に示すように, [主語—動詞—目的語] という形式をとってはいるものの, 普通の他動詞構文とは異なる特徴をもつ。

- (1) a. Mary smiled a sweet smile.
b. Mary lived a happy life.
c. Susan slept a sound sleep.

まず, この構文に現れる動詞は, (2)に示すように同族目的語以外の目的語を自由にとることができないことや, (3)に示すように同族目的語は省略可能であることから, 基本的には自動詞であると考えられている。

- (2) a. *He smiled me.
b. *John lived an old man in the forest.
c. *She slept the baby.
- (3) a. Mary smiled (a sweet smile) at me.
b. Mary lived (a happy life) in this country.
c. Susan slept (a sound sleep) on the ground.

また, 目的語位置には動詞と形態的に同族の名詞がきて, 修飾語句が必要であるとされている (Jespersen 1933 など)。¹

- (4) a. *Bill sighed a sigh.
b. *The old man walked a walk.
c. *She smiled a smile at me.

こうした同族目的語構文に関する統語的分析において, その関心は, この構文に現れる動詞の特徴づけや, 同族目的語の統語的位置づけにあった。動詞に関しては多くの研究者が, この構文に現れる自動詞は非対格動詞ではなく, 非能格動詞であると主張している (Keyser and Roeper 1984, Larson 1988, Massam 1990, 大室 1990, Macfarland 1994,

Levin and Rappaport Hovav 1995 など)。² そうした場合、自動詞のあとに現れる名詞に対して、何らかの統語的説明をあたえなければならない。同族目的語の統語的位置づけに関しては、大きく分けると、付加詞 (adjunct) とみなす付加詞分析 (Jones 1988, Moltmann 1989 など) と、動詞の項 (argument) とみなす項分析 (Larson 1988, Massam 1990, Macfarland 1994 など) に分かれる。

付加詞分析をとる Jones (1988) では、同族目的語が項か付加詞かを判断するテストとして、受動文を取り上げ、同族目的語構文は受動化できないので、同族目的語は付加詞であるとしている。例えば、動詞 dance の場合は、(5b)のように受動化できるので他動詞であり、a merry dance は動詞の項であるとみなされ、(5a)は同族目的語構文ではないとする。一方、動詞 live の場合は、(6b)に示すように受動化できないので、(6a)は同族目的語構文であると主張している。その際、live は自動詞であり、an uneventful life は動詞の付加詞であるとしている。

- (5) a. Sam danced a merry dance.
 b. A merry dance was danced by Sam. (Jones 1988: 91)
- (6) a. Harry lived an uneventful life.
 b. *An uneventful life was lived by Harry. (*ibid.*)

しかし、同じ動詞であっても、同族目的語の修飾要素によっては、受動文の容認性が変わる場合がある。例えば、上記の(6b)では、動詞 live の受動文は非文とされ、したがって live は自動詞であるとみなされたが、(7b)のように受動文が可能な場合もある。このような場合、Jones の分析では live は他動詞ということになり、矛盾する。

- (7) a. Susan lived a good life.
 b. A good life was lived by Susan. (Rice 1987: 210)

一方、項分析において、例えば Massam (1990) では、同族目的語を動詞から Patient の θ 役割が与えられる直接目的語と考えている。この場合も、動詞によって同族目的語をとれるか否かが決まるため、同じ動詞が(6b)と(7b)のような対比を示すことを説明できない。³

Jones が受動化をテストとして、他動詞が同族名詞を目的語にとる場合を同族目的語構文とみなさなかったように、機能主義的アプローチをとる高見・久野 (2002) においても、用いるテストこそ異なるが、他動詞の場合を同族目的語構文に含めないと主張している。高見・久野 (2002) では、同族目的語を伴う動詞の自他を判断するテストとして、同族目的語を代名詞 it で指示できるかどうかという方法が有効であるとしている。例えば、(8)の動詞 laugh や smile は、目的語に it をとれないことから自動詞であり、(9)の動詞 sing や dance、さらに live や run は、it をとれるので他動詞であるとする(他に、jump, dream,

fight も同様のテストにより他動詞であると主張している)。

- (8) a. He laughed a hearty laugh. *He *laughed it* because he was truly amused by her joke.
 b. He was horrified, but he smiled a happy smile. *He *smiled it* in order to disarm the intruder. (高見・久野 2002: 148)
- (9) a. John sang a beautiful song. He *sang it* to cheer her up.
 b. Mary danced an exotic dance. She *danced it* to show us her experiences in Asian countries.
 c. He lived a happy trouble-free life. He could *live it* because his wife took care of all the difficulties.
 d. Mike ran his second run of the day along the Esplanade. He *ran it* in ten minutes, breaking his previous record by 10 seconds.

(*ibid.*: 148-149)

こうした結果をふまえて、同族目的語構文は(8)のような自動詞の場合だけであり、(9)のように、sing や dance などの「動詞が形態的に同族の名詞を目的語にとっていても、それは、他動詞がたまたま同族の名詞を目的語にとっているだけで、同族目的語構文ではない (p.152)」と述べている。⁴

しかしながら、高見・久野 (2002) が典型的な他動詞と考えている動詞 dance についても、以下の(10b-c)のように同族名詞を修飾する形容詞が違うだけで、その目的語を it で指示できなくなる。⁵

- (10) a. Mary danced an exotic dance. She *danced it* to show us her experiences in Asian countries. (=9b)
 b. Mary danced a nervous dance. *She *danced it* because she couldn't sleep last night.
 c. Mary danced a staggering dance. *She *danced it* because she took a tranquilizer before the contest.

つまり、(10a)のテスト結果から他動詞であると判断された動詞 dance が、(10b-c)の場合では、自動詞と判断されることになり、(10b-c)は、(10a)と違って、同族目的語構文ということになる。つまり、動詞 dance が同族名詞を目的語にとる場合に、他動詞文と判断される場合と同族目的語構文と判断される場合が存在することになり、dance の場合を同族目的語構文のカテゴリーから排除する根拠がなくなってしまう。

本論では、認知文法の考え方に基づいて、同族目的語構文が閉じた集合ではなく、プロトタイプから拡張例までを含むカテゴリーを形成し、ダイナミックにその領域を広げつつ

あることをみていく。その際、高見・久野（2002）で他動詞であるという理由から排除された動詞（sing, dance, live, run, jump, dream, fight など）の場合も、同族目的語構文のカテゴリーのメンバーであり、それぞれの表現の他動性の違いは、動詞の自他だけによるものではないことを指摘する。

また、コーパス等で実例を探しているとき、同族目的語構文としては馴染みのない表現、例えば、動詞が非対格動詞の場合(11)や、目的語位置の名詞が同族名詞ではない場合(12)が、ごく稀に見つかることがある。それらはよく使われる同族目的語構文と異なる点があるにもかかわらず、非文とされず、容認可能と判断される。

(11) a. The tree *grew* a century's *growth* within only ten years.

b. The stock market *dropped* its largest *drop* in three years today.

(高見・久野 2002: 142)

(12) a. He *slept* a fitful *slumber*.

b. He *smiled* a silly *grin*.

このような表現がどうして作り出され容認されるのか、Langacker (2000) の提唱する用法基盤モデルの考えを用いて、その動機づけを探り、これらの表現も同族目的語構文カテゴリーの周辺事例として位置づけられることを示す。

次節では、まず、ここでの主張の理論的基盤である認知文法概念について簡単に概説する。

2. 認知文法の理論的枠組み

2.1 カテゴリー観と用法基盤モデル

認知言語学的立場で研究を進める上で、それが前提とするカテゴリー観について触れておく必要がある。そもそも認知言語学が依拠するカテゴリー観は、Rosch (1978) の提唱するプロトタイプ理論である。この理論では、カテゴリーは、そのカテゴリーにとって中心例・典型例とみなされる「プロトタイプ (prototype)」と、プロトタイプから何らかの側面において逸脱する周辺的事例から構成されており、それらが家族的類似性によって互いに関連しあっていると考える。古典的カテゴリー観で想定されるように、カテゴリーの成員が全て同じ必要十分条件的な特性を共有している必要はない。

一方で、このプロトタイプだけに基づいたカテゴリー観ではうまく説明がつかないことも観察されるようになり、その欠点を補う概念として、認知文法の提唱者である Langacker (1987, 1991) は「スキーマ (schema)」という考え方を取り入れてカテゴリーを規定している。スキーマとは、プロトタイプとその拡張例とみなされる事例との間に抽出される共通性・一般性のことであり、スキーマとプロトタイプとを統合した形でカテ

ゴリーの形成が行われるとしている。Langacker によれば、プロトタイプからの拡張はスキーマ抽出を伴うことが多く、抽出されたスキーマは、プロトタイプからの拡張と結びついて、カテゴリーの中に階層的に組み込まれると主張している。こうした、プロトタイプとその拡張、およびスキーマからカテゴリーを特徴づけるアプローチ（「ネットワーク・モデル」）は、自然類（natural class）だけでなく、言語的カテゴリーにも適用される。

さらにこうした考えは、「動的用法基盤モデル（dynamic usage-based model）」の考え方へとつながる。（Langacker 2000）。これは、私たちの言語知識の動的・可変的側面を捉えるモデルである。そこでは、私たちの言語知識は、実際の言語使用において頻度が高く、定着度の高い具体的用法と、それらを一般化して得られるスキーマがネットワークをなしている、と考える。

最初は馴染みがないことでも、何度も繰り返し経験することによって定着（entrenchment）が進み、十分定着が進むと、それ全体で一つのまとまりをなす「ユニット（unit）」（認知処理上の単一体）として機能するようになる。例えば、painter や singer などの名詞は、それぞれ動詞（paint や sing）と接尾辞-er から構成された複合表現であるが、英語の話者にとっては使用頻度が高く非常に馴染みのある語なので、それ全体で慣習化された一つの言語ユニットになっている。そのため、それらの語は、普段はその内部構造を意識されることなく、それぞれ一つの語として言語体系に存在している。図1において、四角で囲まれているものが、慣習的言語ユニットを表す（四角の中の上段は意味構造、下段は音韻構造を簡略化して表している）。

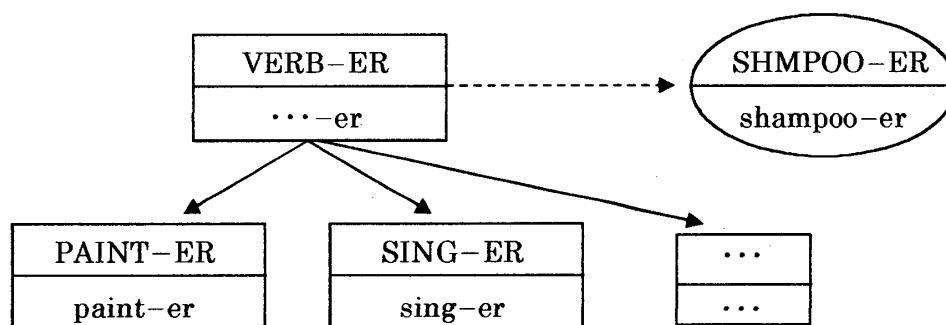


図1

また、この種の語から抽出された抽象レベルの構文スキーマ [VERB-ER / ...-er] も、定着が進むと言語ユニットとして確立し、言語体系に存在するようになる。そして、この構文スキーマは、新しい表現を構築する際や認可する際に特に重要な役割を果たす。例えば、馴染みがない shampooer という表現は、構文スキーマ [VERB-ER / ...-er] に則って、動詞 shampoo に接辞-er をつけて作り出された表現である。この表現は、適切な文脈（例えば、ある美容院で客がスタッフに “Who is the shampooer?” と聞いているような

文脈など)があれば、「シャンプーする人」という意味で問題なく使用され、理解されうる。しかし、shampooer はあまり馴染みがない表現で、言語ユニットではない(このことは、図 1 において shampooer が楕円で囲まれていることで示される)。したがって、この表現はある文脈において一時的に使われうる、構文スキーマ [VERB-ER/...-er] の拡張とみなされる(図 1 において、拡張は破線の矢印、具体化(スキーマ化)は実線の矢印で示されている)。

このような過程は、単語レベルだけでなく、句や文レベルの現象にもあてはまる。また、抽出されるスキーマも、その抽象度や定着度は様々である(例えば、give me a package などの give の様々な具体事例から、一部具体的な語を含む構文スキーマ [give me NP] や [give NP NP]、一般的構文スキーマ [V NP NP] が抽出される)。⁶

用法基盤モデルでは、実際の言語使用経験が、言語システムに大きな影響を与えると考える。中でも、ある言語形式(またはパターン)の生起頻度(frequency)は、言語構造や運用において、最も重要な動機づけをあたえる要因の一つであるとしている。したがって、もとは新規の表現でも、用いられる頻度が高くなると、定着度が強まり、その結果、慣習化された言語ユニットとして言語体系に取り込まれる可能性がある。また、頻度が高い具体事例にもとづく下位スキーマは、それ自体定着度が高くなるので、より抽象的な上位スキーマに包含されうるものであっても、それには還元されずに、独立に存在するものになる。

このように、認知文法の用法基盤モデルでは、文法(言語体系)を、具体事例から様々な抽象度のスキーマまでを含めたネットワークの総体と想定し、言語の動態を捉えることを可能にしている。

2.2 認知的際立ちと言語構造

認知文法では、言語には私たち人間の事象認知のあり方が直接反映されていると想定して、「意味は、概念化(conceptualization)である」としている(Langacker 1987, 1991)。すなわち、ある言語形式の意味は、客観的な状況から一義的に決まるものではなく、言語形式と意味の間には、話者のその状況に対する解釈(construal)や見方(perspective)といった主体的な側面(認知プロセス)が反映されているというのである。

そうした認知プロセスのうち、認知的際立ちに関わる認知プロセスは特に重要であり、心理学でいう「図と地の分化」に相当する。私たちが外界を知覚する際、その中のすべてのモノや出来事に均一に注意を向けて知覚しているわけではない。むしろ、何か際立つものに焦点をあてて知覚している。その際、注意の焦点となり認知的に際立つものは「図(figure)」, その背景となり認知的際立ちの低いものは「地(ground)」とみなされる。こうした「認知的際立ち」という要因が言語構造を決定する基本的要因となる(Langacker 1987, 1991, 中村 1997)。まず、認知的際立ちの有無によって言語化され

るか否かが決まる。次に、その際立ちの強弱によって、言語構造の前景部（中核部）で表現されるか、後景部（周辺／修飾部）で表現されるかが決まる。最後に、その前景部で表される参与者（participant）のうちでも際立ちに差が認められ、例えば他動詞文においては、最も際立つものが主語、次に際立つものが直接目的語で表されるというのである。

このように、主語・目的語選択にも、事態を構成する参与者間の認知的な際立ちの違いが反映されていると考えると、次のような例文の違いにもうまく説明が与えられる。

- (13) a. Mary resembles my sister.
b. My sister resembles Mary.

人が何に注目するか（何に際立ちをおくか）は、固定的に決まっているわけではない。(13)では、「メアリと話者の妹が似ている」という客観的な状況は同じであるにもかかわらず、話者がメアリと妹のどちらにより注目しているか（どちらにより強い認知的な際立ちをおいているか）という点で、(a)と(b)のどちらの文を選択するかが異なっている。つまり、話者は、その状況を描写する際、最も強い際立ちをおいた方を主語にし、評価や位置づけの基準となる二番目に際立つものを目的語として選んでいる。したがって、メアリと妹への際立ちのおき方の違いが形式の違いに反映されて、(a)と(b)の意味の違いを生み出しているのである。

認知文法では、「名詞」や「動詞」, 「主語」や「目的語」などといった文法範疇も全て、概念的・意味的基盤をもつカテゴリーであると考えられている。例えば、「主語」と「目的語」という基本的な文法関係を含む他動詞節も、プロトタイプとスキーマの両面から特徴づけられる (Langacker 1991)。他動詞が表す事態のプロトタイプは、John moved the table. や John broke the window. などの例文が示す事態のように、「一方の参与者 x が他方の参与者 y へエネルギー伝達し、それによって、エネルギーを与えられた参与者 y が位置変化または状態変化を引き起こすような事態」である。この事態認知を図示すると以下のようなになる。

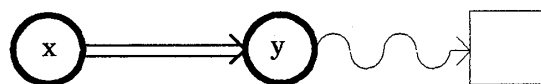


図 2

break, kill, hit, push などのプロトタイプ的な他動詞では、その主語は動作主 (Agent), 直接目的語は被動作主 (Patient) である。このような動詞は、他動性が最も高いといえる。さらに、他動詞節で示される事態には、see, hear などの知覚行為や, resemble, intersect などの対称関係も含まれるが、その他動性は徐々に低くなり、それに伴って他動詞節で示される事態の特性も抽象化していく。つまり、すべての他動詞節が共有するスキーマ的特性は、「一番際立つ参与者（トラジェクター）が主語であり、主語に次いで第二の際立ち

が与えられた参与者（ランドマーク）が直接目的語である事態」といった抽象的なものになる。⁷

英語の多くの他動詞構文では、動詞が二つの参与者間のある種の相互関係を表しているので、主語と目的語に際立ちがあることは動詞によって保証されている。例えば、動詞 break の「壊す」という事態には「壊す人」と「壊される物」、動詞 see の「見る」という事態には「見る人」と「見られる対象」というように、主語と直接目的語によってそれぞれの事態の参与者が別々に表されなければならない。

一方、動詞が目的語の際立ちを保証せず、むしろコンテキストや話し手の意識によって目的語に際立ちが与えられる場合も存在する（中村 1997）。先に述べたように、同族目的語構文に現れる動詞は典型的には自動詞である。自動詞によって表される事態では、行為者（主語）のみ、その際立ちが動詞によって保証される。同族目的語構文は、話し手が動詞で示される行為をより詳しく述べるための一つ的手段として確立した言語形式であり、話し手が同族名詞に修飾要素を加えて、認知的に際立たせることによって、「一番際立つ参与者(tr)が主語であり、第二の際立ちが与えられた参与者(lm)が直接目的語である事態」という他動詞構文のスキーマを満たすことができる。ただし、トラジェクターとランドマークの間の直接的な相互関係を表す動詞に比べ、他動性はかなり低いといえる。他動詞節において、その「主語」と「目的語」の生起が、認知的際立ちという要因によって動機づけられていると考えると、同族目的語構文は、プロトタイプの他動詞文と異なる面があるものの、同じ他動詞構文カテゴリーの周辺メンバーとして位置づけられることが可能となるのである。

2.3 同族目的語構文のスキーマ

同族目的語構文において、目的語位置には動詞派生名詞が現れる（-tion などの接辞を伴う場合もあるが、動詞と同形の場合が多い）。Langacker (1991) では、このような動詞派生名詞は、完了相動詞が表すプロセスを一コマ（一つの出来事）として表している名詞であると考えられる。図 3 において、(a)は動詞が表す完了プロセス、(b)はその完了プロセスをモノ（thing）として捉えた場合を表している。

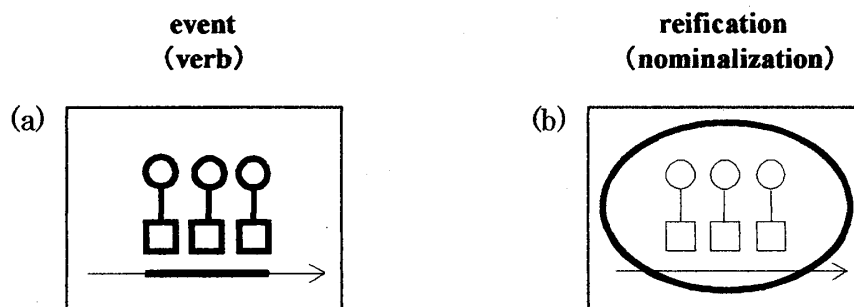


図 3

完了プロセスには、もともと内在的に時間的境界がある（つまり、事態の始まりと終わりがある）。このことは、図 3(a)では時間軸上の太線の部分によって示されており、その間、事態を構成する各状態が連続走査(sequential scanning)されている(ここでは3つの□で示される)。一方、動詞派生名詞は、図 3(b)に示すように、基となるプロセスを、その時間の解釈を捨象し、累積走査(summary scanning)することによって、あたかも一つのモノであるかのように見なしたものである。このような名詞化を、Langacker は「エピソード的名詞化(episodic nominalization)」と呼んでいる。

(14) a. PERFECTIVE VERBS:

John will *walk* to the market.He will *shout* to the players.She can *imitate* her teacher.

b. EPISODIC NOMINALIZATIONS:

John will go for *a walk* to the market.He will give *a shout* to the players.She can do *an imitation* of her teacher.

Langacker (1991) では、同族目的語をこのエピソード的名詞であるとし、同族目的語構文のスキーマを以下の図 4 のように表している。

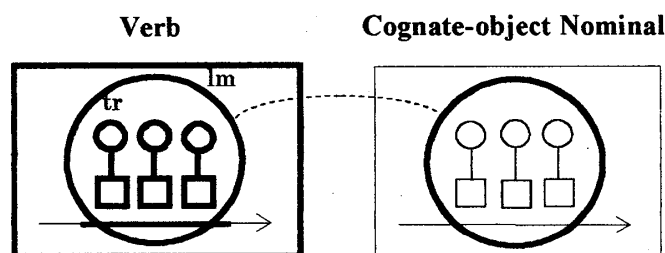


図 4 同族目的語構文のスキーマ (Langacker 1991: 364)

図 4 において、トラジェクター (tr) が主語で、ランドマーク (lm) が目的語となる。同族目的語構文の場合は、事態の参加者は動詞で示される動作の行為者だけであるので、この参加者が主語となる。一方、目的語は動詞が表す事態の参加者ではなく、動詞の示す完了プロセスをモノとして捉えたエピソード的名詞である。この名詞に際立ちが与えられ(太線で表示)、ランドマークとなり、他動詞の形が保証される。破線は動詞の表す事態と同族目的語の表す事態が一致していることを示す。普通の名詞はモノ (thing) を示すが、同族目的語に現れる名詞は動詞的解釈と名詞的解釈の二つを併せもつ名詞であるといえる。

同族目的語構文のスキーマ (図 4) が規定するように、動詞の表す事態と同族名詞の表す事態が基本的に同一であるとする、目的語の lm としての際立ちは、さらに何らかの情報を加えることによって保証されなければならない。Rice (1988) でも、「同族目的語構文の容認性は、プロセスとプロセスから生じたもの間いかに概念的違いが見いだせるかに関わる (p.208)」とし、同族名詞に対する修飾語句の必要性を主張している。し

たがって、通常、(15a)のように同族名詞が修飾語句を伴わない場合は、容認されない。

(15) a. *He smiled a smile.

b. As he knew it must be another bibliophil he said nothing but *smiled a smile*.
(大室 2004: 146)

それは、動詞が表す意味と、同族目的語が表す意味が同じであるため、新たな情報が何も加えられておらず、同族目的語に際立ちを認める同族目的語構文のスキーマに合致しないと判断されるからであろう。つまり、構文によって保証される目的語の際立ちと、その同族目的語の実際の意味内容がゼロに等しいという解釈との間に矛盾が生じるのである。しかしながら、同族名詞に修飾語がない場合でも、文脈によっては認められる場合がある。例えば、(15b)のような状況においては、同族名詞に修飾語句をつけていないということが、かえって意味をもつ。つまり、その文脈においては、前の「何も言わない」ということと対比させて、その *smile* が何の特徴もないものであり、単に微笑んだだけであると解釈されるのである。その場合は、文脈から目的語の際立ちが保証されるので、その同族目的語構文は容認されるのである。

このように、通常とは異なる形式であることにむしろ意味を見いだすことができるのも、用法基盤モデルの考えに基づけば、そもそも比較の基準となる同族目的語構文のスキーマが存在するからであるといえる。そして、特に文脈が与えられていない場合には、同族目的語が *lm* でなければならない（際立ちが与えられなければならない）というスキーマを満たすことができない表現でも、文脈の助けを借りることによって、そのスキーマに合う表現へと変わることができる。文脈などによってスキーマと合致していると判断されれば、普通は容認性の判断が微妙な事例であっても、同族目的語構文のカテゴリーのメンバーとして認められることになる。このように、基となるスキーマからずれている表現は、文脈によってその容認性が変わる。つまり、周辺例ほど、スキーマに合致させるために、文脈に依存する度合いが高くなるのである。

次節では、同族目的語構文のスキーマに基づき、同族目的語構文のカテゴリーに含まれる動詞や同族目的語表現について検討し、同族目的語構文のカテゴリーが中心的な用法から様々に拡張していく様を捉えていく。

3. 同族目的語構文のカテゴリーとその拡張

3.1 同族目的語構文に生起する動詞について

図4の同族目的語構文のスキーマは、*smile* や *laugh* などの非能格動詞の具体事例から抽出されたスキーマである。そもそもプロトタイプの非能格動詞の表す事態は、単一の参加者が自らにエネルギーを与え、それによって行為をなしている自律的事態であると想定

される。エネルギーが再帰的であるということは、他の参加者の働きかけを必要とせず、自らの意志や意図によって行為を行っていることを意味する。したがって、非能格動詞のプロトタイプの意味役割は Agent である。また、再帰的エネルギーは、別のものに働きかけるのではなく、主語に向けられるため、そのエネルギーによって主語による行為だけが生み出されると解釈することもできる。この解釈は、同族目的語構文が、(16)のように、動詞の示す行為と同じことを表す名詞を目的語にとり、異なるものと解釈される名詞は目的語にとれない動機づけを与える。

- (16) a. He smiled a silly {smile/*laugh} .
 b. He danced a merry {dance/*jump} .

また、他動詞が同族目的語構文に現れないことも、事態認知の点からうまく説明がつく。ここで、「他動詞」として指している動詞は、二つ（以上）の参加者間の直接的な相互関係を表す動詞である。一方、同族目的語構文で表される事態は、単一の参加者による行為である。したがって、他動詞によって表される事態と同族目的語構文によって表される事態は合致しないので、他動詞は同族目的語構文に生起できないのである。

- (17) a. *Mary cut a sharp cut.
 b. *I knocked a hard knock.

Jones (1988) や高見・久野 (2002) においては、受け身文や目的語を *it* で指示する形式をテストに使用して、他動詞と判断される場合を、同族目的語構文のカテゴリーから排除した。しかしながら、先にも述べたように、同族目的語の修飾語句を変えるだけで、その統語テストの結果が異なり、他動詞と判断され排除された動詞が、自動詞と判断される場合がある。

- (18) a. *An uneventful life was lived by Harry. (= (6b))
 (cf. Harry lived an uneventful life.)
 b. A good life was lived by Susan. (= (7b))
 (cf. Susan lived a good life.)
- (19) a. Mary danced an exotic dance. She *danced it* to show us her experiences in Asian countries. (= (10a))
 b. Mary danced a nervous dance. *She *danced it* because she couldn't sleep last night. (= (10b))

上記の統語テストによって判断されることは、目的語位置の名詞が動詞の項かどうかということであるが、認知的観点から言えば、目的語で表されているものが、動詞が表す事態とは何か別の意味内容をもつ参加者の一つであると解釈されるかどうか、ということにな

る。つまり、同族目的語の解釈の違いが、同族目的語構文全体の他動性の違いに影響を与える。同族目的語の解釈は単に動詞によってのみ決まるものではなく、どのような修飾要素を伴っているのか、同族目的語全体で、動詞と同じプロセスの解釈と「モノ」の解釈のどちらをより強く想起させるかなどと関係する。例えば、*smile* は非能格動詞であるが、同族目的語の解釈によって受動文が容認される場合がある。

- (20) a. *Shirley smiled a silly smile.*
 b. *All the contestants smiled Marilyn Monroe's smile.*
 (21) a. **A silly smile was smiled by Shirley.*
 b. *Marilyn Monroe's smile was smiled perfectly by all the contestants.*

(20)では、(a)が「無邪気に微笑む」というプロセス的解釈がなされるのに対し、(b)の方は、「マリリンモンローの微笑み」という、動詞の行為から切り離された、すでに存在する何か特別な「微笑み方(微笑みのタイプ)」として解釈される。そのような同族目的語の「モノ」的な解釈が影響して、*smile*は典型的な自動詞にもかかわらず、(21b)に示すように、その受動文が容認される。したがって、(20a)と(20b)の間の他動性の違いを生じさせたのは、同族目的語の解釈であるといえる。

同様に、上記の(18)(19)の場合も、同族目的語の解釈の違いが、受身文や代名詞*it*での指示が可能かどうかの違いを生み出していると考えられる。*dance*, *sing*, *live*などの動詞が表す事態は、主語の意図的・意志的な行為を表しており、事態解釈の点から、同族目的語構文の意味と合致すると考えられる。また、それらの動詞の同族目的語構文が他の非能格動詞の場合より高い他動性を示すのは、動詞自体が何か他動的な行為を表すのではなく、同族名詞が「モノ」としての解釈されやすい(つまり主語以外のもう一つの参与者の存在が見いだされる)ことによる。したがって、動詞*smile*を同族目的語構文のカテゴリーから排除できないのと同様、*dance*, *sing*, *live*などの動詞が同族名詞をとる場合も、その実例が比較的多いことから、同族目的語構文とみなすべきであり、分析の対象に含める必要があるのではないだろうか。

3.2 同族目的語構文の中の非対格動詞

同族目的語構文に現れる動詞について、Keyser and Roeper (1984), Massam (1990), 大室 (1990), Levin and Rappaport Hovav (1995) などでは、「自動詞のうち非対格動詞ではなく、非能格動詞しか同族目的語構文に生起できない」という非能格性制約を主張している(例文(22a-e)は、Levin and Rappaport Hovav (1995: 40, 148-152), (22f)は Keyser and Roeper (1984: 404) より引用)。

- (22) a. **The glass broke a crooked break.*
 b. **The actress fainted a feigned faint.*

- c. *The apples *fell* a smooth *fall*.
- d. *Phyllis *existed* a peaceful *existence*.
- e. *She *arrived* a glamorous *arrival*.
- f. *We *approached* a strange *approach*.

しかし、非対格動詞に分類されている動詞でも、同族目的語構文に現れる場合がある。例えば、動詞 *die* は、「死ぬ」という非意図的な事態を表しているため、一般に非対格動詞に分類される動詞であるが、同族目的語構文によく現れる。

- (23) a. My grandfather *died* a natural *death*.
 b. Your son *died* a soldier's *death* in the cause of democracy.

また、動詞 *blush* や *bleed* も、Perlmutter (1978) , Perlmutter and Postal (1984) では、主語の非意図的な事態を示す非対格動詞であると考えられているが、以下のような同族目的語構文は容認可能である。

- (24) a. Catharine *blushed* a *blush* of anger.
 (Levin and Rappaport Hovav 1995: 160)
 b. Mr. Spock *bleeds* green *blood*.
 (Rice 1988: 208)

ただし、上記の動詞は、研究者によって非対格動詞か非能格動詞か意見が分かれる。例えば、動詞 *die* について、Larson (1988) らは非能格動詞と主張している。また、*blush* や *bleed* についても同様で、Levin and Rappaport Hovav (1995) では、非対格動詞ではなく、生理現象を示す非能格動詞と考えている。ただし、これらの主張は、動詞の表す意味を考慮した結果ではなく、同族目的語構文や way 構文を非能格動詞の診断テストとして考えているため、そうした構文に表れるから、非能格動詞であると主張しているにすぎない。

ここでは事態解釈の点から、*die* や *blush* や *bleed* などの動詞の表す事態が、非能格動詞としても、非対格動詞としても解釈される特性をもっていると想定する（例えば、言語によってそれらの意味を表す動詞の非対格性が異なる）。したがって(23)(24)で挙げられた動詞は、コンテキストを与えられることによって、非対格動詞でありながら非能格動詞的な意味を表すと解釈され、構文の意味に合致すると判断されたのである。

しかしながら、高見・久野 (2002) では、明らかな非対格動詞でも同族目的語構文に現れる場合があることを示した（例文は、高見・久野 (2002: 142) から引用）。

- (25) a. The tree *grew* a century's *growth* within only ten years.
 b. The stock market *dropped* its largest *drop* in three years today.
 c. The stock market *slid* a surprising 2% *slide* today.

- d. Stanley watched as the ball *bounced* a funny little *bounce* right into the shortstop's glove.
- e. The apples *fell* just a short *fall* to the lower deck, and so were not too badly bruised.

これらの動詞が示す事態は、すべて非意図的な状況であり、木や株価やボールなどの意図的な行為であるとは考えにくい。したがって、意味の観点から考えても、これらの動詞は、対象 (Theme) を主語にとる典型的な非対格動詞であり、非能格動詞であると主張することは難しいとしている。

このような事例は、非能格性制約を唱える研究者にとっては反例となる。したがって、高見・久野 (2002) では、「自動詞のうち非対格動詞ではなく、非能格動詞しか同族目的語構文に生起できない」という非能格性制約は誤りであると主張する。そして、(25)の非対格動詞の例 (や後でみる動詞の同族名詞以外の名詞が目的語にくる場合) を含めて、適格であると判断される全ての同族目的語構文に当てはまるような機能的制約を提案している。⁸ しかし、高見・久野 (2002) の挙げる非対格動詞の例文(25)は作例であって、実際は、これらの動詞が同族目的語をとる例は非常に稀で、あまり使われない。⁹ 非対格動詞は、一般に同族目的語構文になじまない傾向があることは確かである。こうした傾向は、高見・久野 (2002) の制約からはうまく説明できない。

本論では、(25)のような非対格動詞の例は、一時的な拡張例であるとみなす。その際、同族目的語構文カテゴリー内に、定着度の高いスキーマとして確立している動詞 *die* の構文スキーマが、このような類の新規の事例を適格かどうか判断する際に大きく関係すると考える。

動詞 *die* の同族目的語構文は、その歴史的な派生過程が、典型的な同族目的語構文とは異なる。Visser (1963) によれば、古英語期に、動詞のあとの与格がゼロ形 (動詞と同形) になる動詞 (*libban lif*, *slepan slæp* など) がすでにみられ、のちに他の多くの動詞も類推によってゼロ形をとるようになった、という。一方、'die a (specified) death' における *death* は、古くは具格 (instrumental) で表されており、中英語期には、*on*, *in*, *a*, *o*, *of*, *by*, *with* などの前置詞を伴って現れていた。また、*a* はもとは *on* または *o* という前置詞であり、それが不定冠詞として用いられるようになったのはずっと後になってからである (*Oxford English Dictionary* より)。

また、構文の表す意味においても、*die* の同族目的語構文は他の典型的な同族目的語構文と異なる。典型的な同族目的語構文では、動詞は主語の意図的・意志的な行為を表す。同族目的語は、その修飾要素による特定化のレベルによって、動詞と同じ行為だけでなく、動詞が表す行為のある種のタイプや、動詞の表す行為の結果として生み出されるものという、いわば「結果の目的語」としての解釈が可能である (ただし、それが動詞の示す行為

の間にのみ存在する点で、一般の結果の目的語とは異なる)。それに対して die の同族目的語構文では、動詞 die は「死ぬ」という主語の非意図的な行為(事態)を示す。また、同族目的語は、死ぬ際の様態を表しており、結果の目的語の解釈はできない(「死ぬ」という行為の間中、「死」が存在するわけではない)。

このように、die の同族目的語構文は、歴史的派生も意味も異なるが、使用頻度がとても高い。Macfarland (1995)によれば、収集した同族目的語構文の実例 2000 例の中で、die が出現数の多い上位 5 つの動詞に入っている (live (420 例), smile (176 例), sing (148 例), tell (144 例), die (113 例)である)。この結果からも、die が同族目的語構文によく用いられていることが分かる。したがって、トークン頻度が高いため、[DIE a ~ DEATH]という構文スキーマが定着度の高い構文スキーマとして確立し、プロトタイプ的な同族目的語構文の拡張として同族目的語構文のカテゴリーに位置づけられると考えられる。その際、プロトタイプと die の構文スキーマから抽出されるスキーマは、[V NP_{co}]という形式と「動詞が示す事態の様態」という抽象的な意味である。

(25)の非対格動詞の例では、それぞれの文脈において、このスキーマ的な意味を満たしていると判断されたため、容認可能となっている。しかし、それぞれの具体事例も極めて少ない(頻度が低い)上、このスキーマ自体も定着度が低いものなので、これらの事例もまた一時的な拡張に過ぎない。このような周辺的な事例は、話者による容認性にも違いがみられるのである。

3.3 同族目的語の特定性

Baron (1971b), 小西 (1981), 安井 (1983)らは「自動詞的同族目的語構文は、動詞と同形または同語源の名詞しか目的語として許さない」と主張している。

- (26) a. *He *died* a glorious *end*. (小西 1981:12)
 b. *He *laughed* an ironical *smile*.

それに対して、Horita (1996)では、そうした傾向が強いが、動詞と異なる形態の名詞でも許される場合があることを指摘した。その際、生起できる名詞は、動詞に対応する同族名詞を意味的に特定化していると判断される名詞である。例えば、(26a)が容認されないのは、名詞 end (終わり)が表す概念が、動詞 die の同族名詞 death と類似した概念を表しているものの、death の特定化された形であるとみなされないのので許されない。一方、(27a)では、名詞 slumber (うたた寝)が動詞 sleep の同族名詞 sleep の特定化されたものとみなされるため、容認可能となる。

- (27) a. He *slept* a fitful *slumber*.
 b. He *smiled* a silly *grin*.

この種の同族目的語構文は、その容認性の判断に個人差がみられるものの、実際のデータの中に明らかに存在している。大室 (2000, 2004) は、Horita (1996) での主張をもとに、大規模コーパス Bank of English の検索結果から、特定の同族名詞が現れる例が、多くはないが、確かに存在すると指摘している (例の数のみ列挙している)。大室 (2000, 2004) によれば、Bank of English では、動詞と同一形態の名詞を目的語にとる同族目的語構文の例は 436 例あり、そのうち、動詞-目的語のペアとして smile-smile の例が 283 例と圧倒的に多い。続いて、laugh-laugh が 67 例、sleep-sleep が 49 例、grin-grin が 33 例と続く。一方、(27) のような、動詞と目的語の形態が同じではなく、特定の名詞を目的語にとる例は 59 例あり、中でも smile-grin, laugh-laughter, die-demise がそれぞれ 9 例、laugh-chuckle が 4 例、smile-beam, laugh-cackle, laugh-giggle, look-glance がそれぞれ 2 例あると報告されている (1 例のみのは省略)。このことによって、数は多くないが、動詞と異なる形態の名詞でも許される場合があるという拙論の主張の経験的基盤がより固められたといえる。

しかしながら、高見・久野 (2002: 174, 注 9) では、Horita (1996) の主張する動詞と主要部名詞との間の特定化の観点では、次のような例がどちらも適格であることを予測できないと指摘している。

- (28) a. "Let's wipe our brows and *smile* a graduation *grin*," said Ms. Ator of Reisterstown.
- b. Nancy *grinned* a mischievous *smile* of recognition as she stooped to Ellen's throat and undid the fastening of the cloak, and then shortly enough bade her "get up, that she might take it off."

高見・久野 (2002) によれば、(28a-b) の smile と grin が、もし仮に特定化の関係になく、単に類似している概念を表しているにすぎないとすると、どちらも不適格であると誤って予測してしまう。また、仮に、(a) の名詞 grin が、動詞 smile の同族名詞 smile の意味の特定化されたものであるとすると、(a) の場合の適格性は説明できるが、(b) では逆の特定化関係を設定しなければならず、(a) の場合と矛盾するため、(b) の適格性を説明できない。逆に、名詞 smile が、動詞 grin の同族名詞 grin の意味の特定化されたものであると考えると、(b) の適格性を説明できても、(a) は説明できないとしている。

そこで、高見・久野 (2002: 146) では、「同族目的語構文においては、同族目的語 (名詞句全体) が示唆する動作の様態が、動詞が表す動作の様態のサブセットでなければならない。」という制約を立てている。¹⁰ Horita (1996) での主張との相違は、動詞と同族名詞との間の特定化関係ではなく、動詞と同族名詞を含む名詞句とのサブセット関係であるとしている点である。ただし、高見・久野 (2002) の主張する機能的制約は、動詞と同形の同族目的語の場合と、目的語位置の名詞が形態的に同族ではない場合を全て同列に扱

っている点に問題があるように思われる（大室（2002）においても同様の指摘がある）。

ここで問題となるのは、(28b)のように動詞の方が目的語位置の名詞より意味的に「特定の」である場合である。大室（2002）によれば、*laugh, smile, die, sleep, sigh* などについて、動詞と目的語の形態がずれる場合を Bank of English で検索した結果、同族目的語よりも動詞の方が「特定の」であるように見える例が僅かだがあったと報告されている。動詞-目的語のペアとして4種類見つかっており、*grin-smile* が13例、*glance-look* が4例、*cackle-laugh* が3例、*slumber-sleep* が1例である（*grin-smile* の事例の数が高より多いことから、このパターンの定着度が高い可能性がある）。目的語の方が特定のである場合は、先に述べたように59例見つかっており、組み合わせの種類も14種類と多い。したがって、動詞と目的語の形態が異なる場合、動詞の意味の方が目的語名詞の意味より特定のな場合は、目的語名詞の意味の方が動詞の意味より特定のな場合に比べ、極めて稀にしか現れず、特殊な場合であるといえる。

ここでは、このような動詞と目的語の形態が異なる場合も、同族目的語構文の拡張例と考える。本来、動詞と同形または同語源の名詞を目的語にとる場合でも、修飾語句を加えることで、名詞の意味をより詳しく特定化する必要がある。*dance* や *sing* の類の同族目的語構文では、名詞が表すものの特定化された下位カテゴリーに属するものが目的語に現れうる（例：*dance Swan Lake, sing a lullaby*）。それがさらに、下位カテゴリーを持たない同族名詞の場合にも、その意味を特定化した名詞を目的語位置にとるという形で、拡張が許されるようになったと考えられる。ただし、同族目的語構文のスキーマに合致するためには、同族目的語の意味があくまで動詞の意味と同じ（矛盾しない）ものであると解釈される必要がある。

さらに、(28b)のように動詞と名詞の特定化関係が逆の場合は、上記の場合のさらなる拡張と考えられる。目的語位置の名詞の意味の方が、動詞の意味より広いため、目的語全体の意味が動詞の意味と矛盾しないものであると解釈されなければ、スキーマに合致しているとはみなされない。それだけ、文脈に依存する必要がでてくる。したがって、これらの表現は、名詞の方が特定のである上記の場合よりも、さらに用例も少なく、生じる文脈もかなり制限されるのである。

このように、同族でない名詞を目的語にとる場合は、同族目的語構文の拡張例ではあると考えられるが、用例も極めて少なく、文脈も制限されるため、定着度の低い表現であるといえる。

4. 結語

本論では、認知文法の考え方に基づく具体的事例分析を通して、同族目的語構文が中心的用法から周辺の用法までを含むカテゴリーを形成していることをみてきた。また、ここ

で想定されるカテゴリーは、固定的なものではなく、動的可變的なものであり、文脈効果などによってカテゴリー化が柔軟に行われていることも浮き彫りにするものであるといえる。

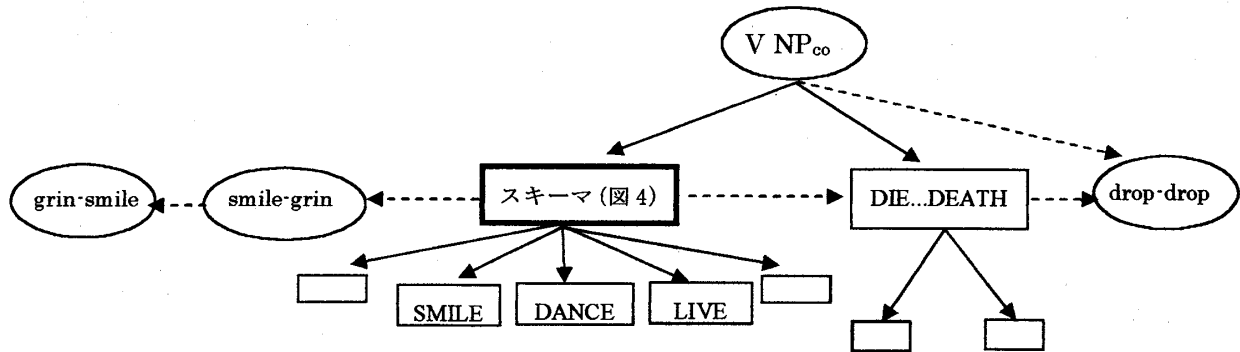


図5 同族目的語構文のカテゴリー

注

- 1 I dreamed a dream.のように、同族目的語に何も修飾語がつかない場合の不自然さに関して、Jespersen (1933) では、次のように述べている：“I very much doubt the occurrence in natural speech of such combinations; the object would be inane and add nothing to the verbal notion” (pp. 234-235).
- 2 自動詞には、意志的または意図的な（コントロール可能な）行為を表すものや、非意図的な（コントロールできない）行為や状態を表すものがある。Perlmutter (1978), Perlmutter and Postal (1984) は、前者を非能格動詞（unergative verb）、後者を非対格動詞（unaccusative verb）として、自動詞を二つに分けている。非能格動詞には、walk や laugh のように動作主（Agent）を主語にしてその意図的な行為を表す動詞や、sneeze や cry のように経験者（Experiencer）を主語とした非意図的な生理現象を表す動詞が含まれる。一方、非対格動詞には、break, faint, fall などの対象（Theme）（または被動作主（Patient））を主語とした非意図的な状況を表す動詞や、exist, arrive, appear などの主語の存在や出現を表す動詞などが含まれる。その他に、形容詞や、start, begin, stop, end などのアスペクト動詞、glitter, glow, smell などの非意図的な発散を表す動詞、last, remain などの継続動詞なども含まれる。
- 3 項分析と付加詞分析のその他の問題点について、詳しくは Horita (1996) を参照のこと。
- 4 ただし、動詞 jump, fight, run に関しては、以下の対比に示すように、同族目的語に修

飾要素が必要なため、それらは他動詞であるが、sing や dance のような典型的な他動詞よりやや自動詞的な、他動詞から自動詞への連続体の途中に位置づけられるとしている。

- (i) a. John sang a song.
- b. Mary danced a dance.
- (ii) a. *John jumped a jump in the Olympic Games.
- b. *They fought a fight last night.
- c. *Mike ran a run along the Esplanade. (高見・久野 2002: 151)

5 例文(10b-c)の容認性の判断は、Stephen Leary 氏(個人談話)に負っている。また類例として、Horita (1996: 240) で挙げた以下のような例もある。(i)の例文の容認性の判断は Michael T. Wescoat 氏(個人談話)による。

- (i) a. Mary danced a traditional dance, and *it* was noticeable.
- b. ?*Mary danced a {staggering/ nervous} dance, and *it* was noticeable.

6 スキーマのサイズは、語レベルから文レベルまで多岐にわたり、具体例との差も抽象度の差でしかないので、認知文法では、語彙(辞書)と文法は連続体をなしているとみなす。

7 認知文法では、動詞や形容詞、前置詞などによって表される、複数の要素の「関係(relation)」概念において、その関係に携わる参加者の中で最も際立つものをトラジェクター(trajector)、二番目に際立つものをランドマーク(landmark)と呼んでいる。

8 高見・久野(2002)では、die, grow, drop などの非対格動詞に分類される動詞が同族目的語構文に現れる場合も規定できるように、次のような機能的制約を立てている(高見・久野 2002: 167-168) :

A. 同族目的語構文は、

- (i) 目的語全体が示唆する動作の様態が、自動詞が表す動作の様態と
 - (a) 同一か、(b) そのサブセットになっており、
- (ii) 自動詞が時間的過程を伴う動作や事象を表わし、目的語全体がその動作や事象の結果として生じる物を表わし、
- (iii) 目的語全体が表わす動作や事象の結果は、私たちの社会習慣上、一般に話題になりやすいものでなければならない。

<注> 'die a ... death' は、一般の同族目的語構文とは異なった歴史的派生過程を持つ例外的構文であって、(ii) の適用を受けない。

B. 同族目的語構文は、「有標」(marked) 構文であって、その使用を正当化する機能的理由がなければ、使用することができない。

<注> 能動文で、目的語が示唆する動作の様態が、自動詞が表す動作の様態と同一(たとえば、*He laughed a laugh.) であれば、同族目的語構文を使用する機能的理由がない。したがって、能動文では、(A(i)a) は無効で、(A(i)b) のサブセット条件のみが有効である。他方、受動文では、同族目的語を主語と

することが正当化されうるかぎり、(A(i)a)も、(A(i)b)と同様、有効である。

特に(iii)の制約は、非対格動詞の例を考慮して提案されているものである。確かに、「死に方」や(25)で示される株式市場の下落や変動といったものが、話題になりやすいという説明は一見説得力があるように思える。しかし、他の制約に比べかなり抽象的であり、普通の非能格動詞（例えば smile や laugh など）が用いられる同族目的語構文にも同じように当てはまる制約とは言いがたい。例えば、Mary smiled a merry smile. において、「笑い方」が社会習慣上、話題になりやすいかどうかは、何を基準に判断したらいいのか、はっきりしない。

- 9 大室（2004）によると、大規模コーパス Bank of English の中で、例えば drop が同族目的語をとる例は 1 例のみであるという。また、Stephen Leary 氏（個人談話）によれば、高見・久野（2002）で示された例のうち、以下の例はおかしいと判断された。

(i) a. ??The stock market *slid* a surprising 2% *slide* today. (= (25c))

b. ?The apple *fell* just a short *fall* to the lower deck, and so were not too badly bruised. (= (25e))

こうした周辺の例においては、容認性の判断には個人差がみられるようである。

- 10 最終的な制約は注 8 に記載されている。

参考文献

- Baron, Naomi S. (1971a) "On Defining 'Cognate Object'," *Glossa* 5: 1, 71-98.
- Baron, Naomi S. (1971b) "Semantic Relations between Verbs of Cognate Objects," *Stanford Occasional Papers in Linguistics* 1, 141-152.
- Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," in Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 1-88, Holt, Rinehart, and Winston, New York.
- Fillmore, Charles J. (1988) "The Mechanisms of 'Construction Grammar,'" *BLS* 14, 35-55.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele E. (1999) "The Emergence of the Semantics of Argument Structure Constructions," in Brian MacWhinney (ed.), *The Emergence of Language*, 197-212, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, New Jersey.
- 早瀬尚子・堀田優子（近刊）『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』英語学モノグラフシリーズ 19, 研究社。

- Hopper, Paul J. and Sandra Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-299.
- Horita, Yuko (1996) "English Cognate Object Constructions and Their Transitivity," *English Linguistics* 13, 221-247.
- 岩倉國浩 (1976) 「同族目的語と様態の副詞と否定」『英語教育』6月号, 60-63.
- Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English Grammar*, George Allen & Unwin, London.
- Jones, Michael A. (1988) "Cognate Objects and the Case Filter," *Journal of Linguistics* 24, 89-110.
- Keyser, Samuel J. and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- 小西研三 (1981) 「同族目的語構文について」『語学の手帖』2.2, 10-15.
- Langacker, Ronald W (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. I : *Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. II : *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W (2000) "A Dynamic Usage-Based Model," in Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage Based Models of Language*, 1-63, CSLI Publications, Stanford.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Constructions," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Macfarland, Talke (1994) "Event Arguments: Insights from Cognate Objects," paper presented at the 68th Annual Meeting of the Linguistic Society of America.
- Macfarland, Talke (1995) *Cognate Objects and the Argument/Adjunct Distinction in English*, Doctoral dissertation, Northwestern University.
- Massam, Diane (1990) "Cognate Objects as Thematic Objects," *Canadian Journal of Linguistics* 35, 161-190.
- Moltmann, Frederika (1989) "Nominal and Causal Event Predicates," *CLS* 25, 300-314.
- 中村芳久 (1997) 「認知構文論」『英語のこころ—山中猛士先生退官記念論文集—』225-240, 英宝社, 東京.
- 大室剛志 (1990/1991) 「同族'目的語'構文の特異性 (1)(2)(3)」『英語教育』11月号, 74-77, 12月号, 78-80, 1月号, 68-72.
- 大室剛志 (2000) 「特定の同族目的語について」『英語教育』9月号, 29-31.
- 大室剛志 (2002) 「有標構文における有標性」『英語語法文法研究』第9号, 35-50.

- 大室剛志 (2004) 「基本形と変種の同定にあずかる大規模コーパス—同族目的語構文を例に」
『英語コーパス研究』第 11 号, 137-151.
- Perlmutter, David (1978) "Impersonal Passive and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4,
157-189.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law," in
David Perlmutter and Carol Rosen (eds.), *Studies in Relational Grammar* 2, 81-125,
University of Chicago Press, Chicago.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*,
MIT Press, Cambridge, MA.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A
Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rice, Sally (1987) *Towards a Cognitive Model of Transitivity*, Ph.D.dissertation, University
of California, San Diego.
- Rice, Sally (1988) "Unlikely Lexical Entries," *BLS* 14, 202-212.
- Rosch, Eleanor (1978) "Principles of Categorization," in Eleanor Rosch and Barbara B.
Lloyd (eds.), *Cognition and Categorization*, 27-48, Lawrence Erlbaum Associates,
Hillsdale, New Jersey.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』研究社, 東京.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*, Oxford University Press, Oxford, New York.
- Ungerer, Friedrich and Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*,
Longman, London and New York.
- Visser, Frederik, Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language, Part One:
Syntactical Units with One Verb*, E. J. Brill, Leiden.
- 安井泉 (1983) 「同族目的語の機能について」『言語情報』79-92, 筑波大学.